



工場萌えでふるさとの光を観る
～“四日市だからこそ”の10年～

Yoshihiro Okada
岡田良浩







— 目 次 —

	ページ
はじめに	6
いまの四日市を観る	7
きっかけは若者たちの故郷への思い	10
すでに動き出していた四日市の「人」たち	20
「四日市コンビナート夜景クルーズ」始動	26
シティセールスに始まる観光の10年	37
四日市だからこそ	52
観光がもたらした意識の変化や気付き	56
「人」の和	61
おわりに	66
「四日市コンビナート夜景クルーズ」の紹介	67
「四日市公害と環境未来館」の紹介	77
あとがき	89

- ※ 文中、「四日市市」または「市」は、行政としての四日市市を指し、「四日市」は、まち・地域としての四日市を指す。
- ※ 企業名、団体名、人物の肩書などは文中当時のものを記した。

はじめに

“四日市と言えば” から、“四日市だからこそ” へ。

平成 22 (2010) 年、四日市では、いまの姿を観る「四日市コンビナート夜景クルーズ」がスタートし、その 5 年後には公害の歴史と教訓を伝える「四日市公害と環境未来館」が開館した。

本書は、ふるさとを思う若者や『工場萌え』の写真家たちによって発想された、いまの魅力をきっかけに、このまちの「人」によって語られ、その和によって紡がれてきた“四日市だからこそ” の 10 年を、「四日市コンビナート夜景クルーズ」、「四日市公害と環境未来館」の紹介を含め、まとめたものである。

時代が変わり、世代も変わっていく中で、次第に“四日市と言えば” への反応さえもが薄まっていく。

本書では、そんな今だからこそ、次の 10 年に向けて、“四日市だからこそ” をひとつのストーリーとして残そうとした。

ここに記させていただいた「人」たちに共通する価値観が、一人でも多くの方々に共感いただけることを心から願う。

いまの四日市を観る

夜空の下で煌めく四日市コンビナート。

平成 19（2007）年発行の写真集、『工場萌え』に取り上げられたその幻想的な風景は、工場夜景の「聖地」と呼ばれるまでになった。

『工場萌え』の著者で写真家の石井哲氏は、学生の頃に観た S F 映画『ブレードランナー』に登場する工場の煌めきに心惹かれ、その後“工場・コンビナートに萌える会”というコミュニティを生んだ。

同じく著者で写真家・ライターの大山顕氏は、千葉の準工業地域のそばで育ち、大学生のときに自分が“工場好き”ということに気付いて、それを修士論文のテーマにしたという。

四日市では、普段見慣れているコンビナートの景観が、まちの魅力や、それを観る観光につながると気付く者は少なかった。そこに当たり前にあるもの、自分たちの“原風景”であったからだろう。

海沿いの石油化学工場や製油所、それらの間で原料やエネルギーを融通し合うパイプライン、林立する煙突たちが放つ煙や蒸気の息遣い、それらを照らすプラント群の光は冬空の下で一層煌めく。

ここでは 24 時間 365 日、私たちが追求する便利で豊かな生活に欠かすことのできない最先端のもの

をつくり続けてきた。

戦後の高度経済成長期には、急激な発展の陰で公害をひきおこしたが、努力してそれを乗り越えてもきた。四日市コンビナートの夜景は、非日常の光景が観る者の記憶に残り、その歴史を思い起こさせる。

幻想的な夜景と、企業OBのガイドが相乗する「四日市コンビナート夜景クルーズ」は、いまの四日市を観る観光として平成 22（2010）年に産声を上げた。

四日市市が、シティセールスに取り組み始めた頃のことである。



写真集『工場萌え』、『工場萌えF』（東京書籍）

○ “観光” の語源

“観光”という言葉の語源について、東海旅客鉄道(株)の初代社長で相談役の須田 寛^{ひろし}氏は、その著書『図で見る観光』（交通新聞社 2018 年）で、次のように紹介している。

「観光」とは中国で約 2000 年前に著された儒学の古典「易経」にその語源がある。

易経には「觀国之光利用賓于王」とある。訓読すると「国の光を觀るは（觀すとも訓する）もつて王の賓たるに用いるに利し」となる。即ち、地域の「光」（美しいもの、秀れたもの）を心を込めて学び、かつみること、ないし心を込めて誇りをもってみせる（しめす）ことによって多くの人々を迎え、人的交流を図ることは王（為政者）の務めであると説いているとされる。

また、須田氏は「産業観光」をテーマとした講演の中で、観光は人の交流を促進する文化活動であり、それに伴う重要な経済活動であるとも述べている。

地域のすばらしいところを見つめなおし交流、滞在につなげる。それが観光なのだ。

観光都市や観光地ではない、いわゆる産業のまちでも、その魅力、強みをしめし観てもらふことは、そのまちが取り組むべき重要なことである。

須田氏が提唱する「産業観光」は、四日市のようなまちに、その可能性を気付かせてくれる。

きっかけは若者たちの故郷への思い

平成 20 (2008) 年 12 月、四日市市では、それまで 3 期務めた井上哲夫^{てつお}市長が勇退し、新たに田中としゆき^{としゆき}俊行市長が誕生した。

田中新市政では、四日市市が目指す都市像として“みんなが誇りを持てるまち四日市”が掲げられ、その施策のひとつに四日市市のシティセールスが推進されることとなった。

その拠点となったのが、市が東京都千代田区に構える四日市市東京事務所である。

シティセールスといっても、四日市の魅力を掘り起こし発信する新たな取り組みをどう進めていけばよいのか、当時、東京事務所の職員たち4名は手探りの状況にあった。

そこで、所長のアイデアで、四日市出身の若者たちを東京事務所に招き、離れたからこそわかる魅力について思う存分に語り合ってもらい、それをふるさと四日市にフィードバックしようということになった。

平成 21 (2009) 年 9 月、四日市出身者が集う「^{よんの かい}四の会」を主宰する映画監督の^{せ ぎ なお き}瀬木直貴氏をコーディネーター役に、漫画家の^{げん だい よう こ}現代洋子氏など東京で活躍する計 8 名の若者たちによって、「東京発 四日市へ (の思い)」と題した座談会が行なわれた。

そこで出された四日市の魅力、キーワードが「コンビナート」「港」「とんてき」である。

この座談会の様子は、伊勢新聞に取り上げられ地元四日市にも伝えられた。

2024年11月11日 月曜



水谷 樹理さん 藤島 朋さん 二之寺 昌弘さん 藤村 英妃さん

瀬木監督ら「四の会」メンバー古里語る

コンビナート、港、とんてき… 四日市に何かしたい

「コンビナート、港、とんてき…」と、四日市に何かしたいという思いを込めて、瀬木監督ら「四の会」メンバーが古里を語り、交流を深めた。

「四の会」は、瀬木監督を中心に、古里を愛する人々が集まり、古里の魅力を発信し、交流を深めることを目的としています。今回の座談会では、メンバーが古里の魅力を語り、交流を深めました。

水谷 樹理さん：古里の魅力を発信し、交流を深めることが、古里の未来を明るくすると思います。

藤島 朋さん：古里の魅力を発信し、交流を深めることが、古里の未来を明るくすると思います。

二之寺 昌弘さん：古里の魅力を発信し、交流を深めることが、古里の未来を明るくすると思います。

藤村 英妃さん：古里の魅力を発信し、交流を深めることが、古里の未来を明るくすると思います。

座談会「東京発 四日市へ」の様子を撮影した写真が掲載されています。

2024年11月11日 月曜



現代 洋子さん 金野 輝也さん 関本 裕介さん 瀬木 貞賢さん

座談会「東京発 四日市へ」

四日市市東京事務所がオープンオフィスに 刺激的な交流の場に

四日市市東京事務所がオープンオフィスに、刺激的な交流の場に。座談会「東京発 四日市へ」の様子を撮影した写真が掲載されています。

現代 洋子さん：四日市市東京事務所がオープンオフィスに、刺激的な交流の場に。座談会「東京発 四日市へ」の様子を撮影した写真が掲載されています。

金野 輝也さん：四日市市東京事務所がオープンオフィスに、刺激的な交流の場に。座談会「東京発 四日市へ」の様子を撮影した写真が掲載されています。

関本 裕介さん：四日市市東京事務所がオープンオフィスに、刺激的な交流の場に。座談会「東京発 四日市へ」の様子を撮影した写真が掲載されています。

瀬木 貞賢さん：四日市市東京事務所がオープンオフィスに、刺激的な交流の場に。座談会「東京発 四日市へ」の様子を撮影した写真が掲載されています。

座談会「東京発 四日市へ」の様子を撮影した写真が掲載されています。

座談会「東京発 四日市へ」(伊勢新聞)

当時、四日市名物の「とんてき」は、市民団体「四日市とんてき協会」によって、まちおこしに生かす活動が活発に行われ、全国的に知名度も上がりはじめていた。

一方、それまで誰も触れようとしなかったのが「コンビナート」であった。

この話題を取り上げた漫画家の現代氏は、当時『工場萌え』がメディアなどでブームになっていたこと、また、自身が高校の美術部時代に校舎の窓から見えたコンビナートの風景が、今も記憶に残っていることを語った。同様に他の参加者も、四日市のコンビナートをまちの魅力として生かせられないかという話で盛り上がることとなった。

座談会で語られた工場の景観は、帰省の際にそれを目にすると四日市に帰ってきたことを実感する、彼らにとっての“原風景”でもあった。

しかし、四日市公害を経験し、その後に環境改善がなされたとはいえ、工場の景観を四日市の魅力として取り上げることについては、皆の中に拭いきれない抵抗感や躊躇もあった。

様々な視点での配慮が必要ではあったが、8名の若者たちが語ってくれた魅力や、それを生かしたシティセールスをという、ふるさとを思う提案を何らかの取り組みにつなげることも重要であったことから、先ずは工場景観の魅力を紹介する写真集『工場萌え』を詳しく見ることとなった。

早速、書店で手に取ると、東京事務所職員たちはそこに捉えられた工場の姿に思わず“萌える”感覚にひき込まれた。同時に、もうひとつ意外であったのは、この写真集を発行した出版社が、小・中学校、高等学校向け教科書を手掛ける業界大手の東京書籍(株)であったことだった。

写真集『工場萌え』は、石井氏と大山氏によって、工場という存在に親しむためのガイドブックとしてまとめられ、まえがきには彼らの思いとして、



工場は企業のもので、複雑な仕組みと時に政治的な要素と、そして決して明るいものばかりとは言えない歴史を持っていることなどが、「工場を何となく好き」と無邪気に言えない理由だと思う。けれど、工場について何も知らなくてもあっけらかんと「好き」と言っていていいと思う。



と記されてあった。また、工場に迷惑をかけないようにマナーを守って楽しむといった説明などもあり、様々な配慮の上で編集され、共感できる部分の多い写真集であった。

そこで一度、石井氏に会おうということになり、早速そのお願いのため東京書籍(株)に連絡を入れることとなった。

『工場萌え』の編集担当者にうまく電話がつながり、四日市市が取り組もうとしているシティセールスや、若者たちによる座談会の内容を伝えたところ、その担当者はよく理解をしてくれて、翌日には石井氏と連絡をとることができた。

石井氏から、会うことはもちろん四日市市への協力の言葉が貰えたときは、東京事務所職員たちの間にシティセールスの取り組みが大きく前進する予感と、もう後戻りはしないという強い気持ちが芽生えた瞬間でもあった。

石井氏を通じてもう一人の著者である大山氏につながり、さらに以前から工場をはじめとする建造物景観の研究に取り組んでいた千葉大学大学院助教の八馬^{はちまさとし}智氏（現千葉工業大学 創造工学部 デザイン科学科教授）にも会うことができた。八馬氏は、観光資源としての工場景観の研究を手がける専門家として、四日市での視察経験があり、また千葉県の観光課と千葉大学が企画した工場観賞バスツアーの中心的な役割を担った人物で、大山氏の大学の先輩でもあった。

このような縁を生かして、若者たちによる座談会から4ヶ月後の平成22（2010）年1月、石井氏、

大山氏、八馬氏を招いた座談会第2弾「工場は美しい」が、市東京事務所において開催されることとなった。

石井氏らは、四日市だけではなく多くの工場地帯も訪れているが、工場群としての広さとまとまりがあり、安心して見られる場所が多く、特に四日市港ポートビルからの眺望（表紙写真）は迫力があるといった四日市の特徴や魅力について高く評してくれた。

また、四日市公害を経験したまちであることを理解した上で、「光を放つプラント自体に責任はない。」「美しいものは美しい、実は工場が好きとカミングアウトしてもよいのでは。」など、工場景観との向き合い方についても真正面から語ってくれた。

一方で、言葉にはされなかったが、彼らの中には工場という存在に親しむためのガイドブックである『工場萌え』が、行政のシティセールスに活用されることに多少の違和感があったかもしれない。

しかしそれは、彼らが“工場は美しい”“工場が好き”という世論を盛り上げてきたからこそで、四日市市という行政までもがそれに近づいていったという彼らのパワーに他ならない。

この座談会第2弾も前回同様、伊勢新聞によって大きく報じられ、これも地元四日市の人たちの知るところとなって、その後のシティセールスの取り組みに大きな弾みとなった。

見直される機能美

身近な景観資源 公害改善説明を 工場への対応が鍵




四日市コンビナートを再認識

工場を見るとき、なぜか、どきどきする。

工場萌え
工場萌えF

世界遺産年報2010
人と日本人

四日市商工会議所
日本写真判定杯・日刊スポーツ杯
2/19、20、21

工場は美しい

工場萌えに共感 半信半疑だった 夜景カッコイ




研究者も画家も 四日市コンビナートを

工場萌えに共感半信半疑だった夜景カッコイ

どう生きるか。

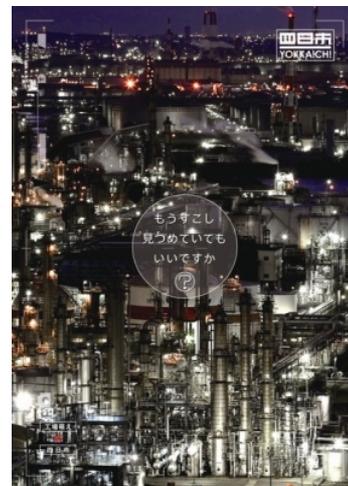
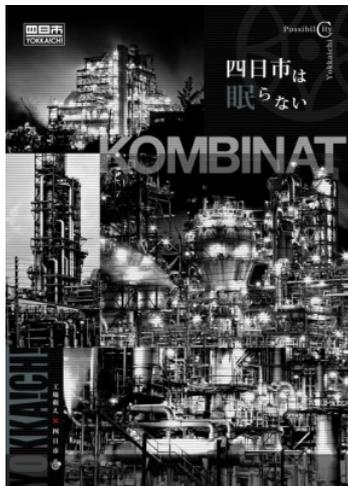
ソニー生命

座談会 第2弾「工場は美しい」(伊勢新聞)

座談会以降、石井氏からは四日市市のシティセールス用ポスターに使用するための画像提供や、その加工などに快く承諾がなされ、東京事務所職員がコピーを添え、デザインしたポスターについてもブログなどで発信された。

これらのポスターは四日市出身の皆さんによっても広く発信され、四日市にある企業や環境関係団体の方々にも受け取られて、事業所のロビーなどでの掲示につながっていった。

こうして四日市市は、ふるさとを離れ、東京から四日市を思う若者という「人」の発想をシティセールスにつなげるために、四日市の工場景観に造詣が深い「人」の力を借りて、はじめの一步を踏み出していった。



石井哲氏とのコラボ “四日市は眠らない” “日本には四日市がある” などのコピーを添えた
四日市市のシティセールス用ポスターの一部 (四日市市発表資料)

すでに動き出していた四日市の「人」たち

四日市市東京事務所が工場景観を活用したシティセールスに動き出した頃より前、平成 19（2007）年頃のことである。地元四日市にも同じ考えの「人」たちがいた。

コンビナート企業を含めた様々な分野の市民が参加する、市の文化振興に関する会議の中で、すでにその企業委員たちからコンビナートの景観を観光資源に活用してはどうかという意見が出されていたのだ。しかし、一般的にコンビナート企業においては、工場景観、特に夜景の観賞といったブームに対し、安全管理上の課題をはじめ、否定的な意見もあったことは容易に想像できる。

これに対し、そもそも見られて都合の悪い場内環境ではないといった、企業の管理職たちの考え方や説得力は、工場景観をシティセールスに活用するうえで大きな後ろ盾であり、存在であった。

時を同じくして、四日市商工会議所の職員や地元の観光事業者たちも、まちの魅力を活用する観光のかたちである「着地型観光」（旅行者を受け入れる地域が、自分たちのもつ地域資源を生かして企画する新たな観光のひとつ。旅行先でのオプションツアーも含まれる）として、コンビナートの夜景を船で案内する企画の検討を始めていたのである。

それは、“旅行商品を売る”から、“観光を創造する”という新たな挑戦でもあった。

のちに、その観光事業者たちが、四日市観光協会内に産業観光PR部会を立ち上げ、「四日市コンパクト夜景クルーズ」の企画、運営を担うこととなる。

これらの動きが市東京事務所で進めていたシティセールスとつながり、平成22(2010)年3月には、それまでも大きな理解を示してくれていた四日市商工会議所の齋藤彰^{しょういち}一会頭の発案によって、石井氏と八馬氏を四日市に迎えた講演会「工場は美しい」が開催されることとなった。

続く翌4月には、四日市青年会議所が八馬氏を招き、講演会「工場萌え」が開催され、行政以外による取り組みも活発になっていった。



四日市商工会議所主催 講演会「工場は美しい」(提供 四日市観光協会)

続く5月には、四日市観光協会産業観光PR部会のメンバーである地元観光事業者2社の代表と、観光協会観光コーディネーターの落合純二^{じゅんじ}氏が上京した。目的は、東京事務所職員とのシティセールスについての意見交換と、「四の会」メンバーと合流しての川崎工場夜景クルーズの体験であった。

この時すでに、産業観光PR部会のメンバーは、

- ① 四日市でコンビナート夜景クルーズを企画しようとしていること
- ② それは公害を乗り越えてきた四日市だからこそ、いまの姿を全国の人に観てもらおうことで、環境面でのメッセージにもつながること
- ③ コンビナートの夜景は、映画撮影の誘致などフィルムコミッションにも活用でき、それが人の交流、滞在につながる可能性があること

といったシティセールス、シティプロモーションの将来像についても描いていた。

同じ平成22年5月には、四日市観光協会の主催（産業観光PR部会担当）で、石井氏、大山氏、八馬氏をアドバイザーに迎えた「四日市コンビナート夜景クルーズ試乗会」が行われた。

産業観光PR部会では、この試乗会を“外からの影響で内側が気付く”重要な機会と位置付け、この日のために船を2艘用意し、そのうち1艘をメディア専用として提供した。

試乗会には、石井氏らの存在感によって、地元をはじめ全国をカバーするメディアが参加し、いまの四日市が広く発信されることとなった。

また、翌6月には商工会議所によって、昼間の工場内や、鉄道ファンに人気の高い現役最古の可動橋

「末広橋梁」(国指定重要文化財)の見学を組み合わせた産業観光ツアー「コンビナート夜景クルーズと産業遺産」が実施され、商工会議所齋藤会頭や田中市長らが参加、その様子がさらに多くのメディアによって報じられ、7月からの夜景クルーズスタートへの準備が整っていった。

「四日市コンビナート夜景クルーズ試乗会」の様子 (提供 四日市観光協会)



産業観光ツアー「コンビナート夜景クルーズと産業遺産」の様子



昼間の工場 工業塩の山 (提供 四日市観光協会)

「末広橋梁」 昭和6(1931)年竣工

公害を経験した四日市で、コンビナート夜景を楽しむ観光が始まったことへのメディア各社の反応は概ね好意的で、約半世紀前と現在とのギャップを感じさせる観光という点が大きく報じられた。

ここに、四日市市のシティセールスのひとつとしての観光、「四日市コンビナート夜景クルーズ」が広く知られることとなった。

「四日市コンビナート夜景クルーズ」始動

夜景クルーズの行程は約 60 分、現在は「90 分プラン」も設定されている。

コースは、試乗会に招いた石井氏、大山氏らによって監修され、それをパンフレットにも明記して夜景クルーズと『工場萌え』との相乗効果を狙った。

さらに市東京事務所の職員は、四日市が紹介されている写真集として、『工場萌え』の特設コーナーを設けてもらえるよう、四日市市内の書店をまわった。石井氏らとのWin-Winの関係を意識してのことだ。そのほか、お客様を迎えるための様々な準備やPR活動を経て、平成 22 (2010) 年 7 月「四日市コンビナート夜景クルーズ」は定期・定時運航という形でスタートした。

準備段階においては、お客様に四日市らしさをわかりやすく伝えるために、大きく三つの点を重要視した。

1 点目は、お客様に四日市ならではの体験と満足感、さらに感動を持ち帰っていただくための、コンビナート企業OBによるクルーズガイドとその語りである。

これは、他の工場夜景都市との違いでもある。

国土交通省認定の観光カリスマを夫にもち、自身も全国を回る吉川美貴^{きっかわみき}氏は、その著書『まちづくりの非常識な教科書』（主婦の友社 2018 年）の中でこう述べている。

人が肉声で伝えるうんちく・語りは、労力も時間もかかるが、目の前に広がる風景を、生き生きとした豊かなものに変えてくれる付加価値化の手段である。（中略）その土地の人と出会い、ふれあえると、がぜんその土地は魅力的になり、印象に残る。

お客様のほとんどは、コンビナート夜景を観たい、スマホやカメラに収めたいという“工場萌え”がきっかけで参加されているだろう。しかし、お客様自身が気づいていない隠れたニーズを地域自らが創り出すことも、まちの魅力をしめす観光にとっては重要である。

そういった意味から、四日市の観光に欠かすことのできない「人」であるクルーズガイドについては、市からコンビナート企業に対して、OBを含めた人選についての協力要請が行われることとなった。

その際、企業側で調整に力を尽くした「人」こそ、市がシティセールスに取り組む前から、工場景観が観光資源になると市の会議で発言していた東ソー(株)四日市事業所の総務課長田中正美^{まさみ}氏である。田中氏は、自社だけでなくコンビナート企業各社との調整役としても、市のシティセールスに力を貸した人物である。本人の口から語られはしないが、当時、社内外の調整には相当な苦労があったことだろう。

実際、市から依頼されて、東ソー(株)OBの方々にクルーズガイドの要請を行ったときのこと。

その取りまとめ役で、田中氏の元上司でもある寺本佐利^{さとし}氏が、企業OBとして、夜景クルーズで工場のプラントを見せること自体に難色を示していたのである。

その理由は極めて常識的で、コンビナート企業の従業員たちが、日頃、細心の注意を払って維持し稼働させているプラントを、不特定の人たちに、しかも物見遊山的に見られることに、安全管理上の問題など強い懸念があったからだ。身近な人を説得し、その意識を変えることが実はいちばん難しかったのである。当時のことを寺本氏はこう話す。「田中正美氏からガイドの要請を受けたあと、同じ会社（東ソー）で現役時代から登山をする仲間であった、古川勝敏^{かつとし}氏、大西通^{とおる}氏、筒井孝男^{たかお}氏にクルーズガイドの要請があったことを伝えると、彼らは意外にも否定せず、むしろ地域貢献に繋がるのであればという積極的な意見であった。」さらに、田中氏による「安全や環境に細心の注意を払っているからこそ、

自信をもって見せることができる」との言葉で、寺本氏の考え方は徐々に変化し最終的に全員の意見が一致していったという。夜景クルーズのスタートから 10 年が経過した現在、寺本氏は市外、県外からのお客様に、より四日市らしいガイドができないかと日々解説に工夫を凝らす中心的な存在である。

他都市にはない企業OBによるクルーズガイドの語りは、寺本氏が四日市市、四日市港管理組合や企業と調整のうえ作成したガイド概要をもとに、

- ① お客様がコンビナート夜景を楽しめること
- ② 我々の生活にコンビナート企業がどのようにかかわっているかを知ってもらうこと
- ③ 公害から環境改善までの経緯
- ④ 四日市の文化や歴史、地場産業や代表的なお土産

などのポイントを解説している。いわゆる製造やプラント関係の技術部門OBである古川氏、大西氏、筒井氏は、クルーズ当日のプラントの様子や、原料など積み降ろしのために着岸する船の作業などに解説を加え、お客様からの質問にもわかりやすく対応する。クルーズガイドそれぞれの個性を生かした案内によって、夜景クルーズ終盤にはお客様から自然と拍手がおこり、夜景の煌きだけでなく文字では伝えることができない空気を感じることができる。

多くの人にとっては遠い記憶となり、世代によっては直接知らない高度経済成長期における光と陰を経験し、現在の四日市を築き上げてきた企業OBたちによるクルーズガイドは、コンビナートの光とともにそれを一層引き立てる四日市の観光になくてはならない存在である。



クルーズガイドの皆さん 写真左から筒井氏、寺本氏、古川氏、大西氏 (提供 四日市観光協会)

○オリジナル切手シート「四日市は眠らない～工場夜景～」 (写真提供 中日新聞社)

工場夜景観光には、企業OBによるクルーズガイドのほか、現役の社員たちによる協力もあった。



四日市の工場夜景を切手シートに、という日本郵便(株)からの提案を受け、市内のコンビニート企業が協力。

東ソー(株)四日市事業所総務課長の田中氏(写真)を中心としたコンビニート企業の総務担当リーダーたちが、地域の人に、もっと工場夜景に親しみを持ってもらおうと取り組んだ。

東ソー(株)、昭和四日市石油(株)をはじめとする企業8社の社員たちは、普段入ることのできない場所からのプラント風景を撮影し、その写真を提供した。

[平成24(2012)年11月]

夜景クルーズでは、クルーズガイド以外にも船会社や昼間の市内見学とのセットツアーの協力者であるバス会社、特産品の「四日市萬古焼」で炊く土鍋ごはんを提供するお店など、それぞれが臨機応変に協力する。これら四日市の観光を支える関係者の結束力も、このまちの強みである。

2点目は、お客様にわかりやすい定期・定時のクルーズ運航である。

この役割を担ったのが、地元の観光事業者、(株)第一観光社長の樋口^{ふじと}藤人氏である。

樋口氏は、同じく地元の観光事業者の有志らで立ち上げた四日市観光協会産業観光PR部会のメンバーで、その幹事的役割を担った。定期運航にこだわったのは、観光事業者としての視点だ。

夜景クルーズが実施者側の都合で不定期に行われると、お客様には実施日が伝わりにくい。

より多くの方々に乗船いただき、四日市のことを知ってもらうには、実施日のわかりやすさや、お客様ニーズの把握とそれへの対応が欠かせないことから、毎週金・土曜日（当初、土曜日は昼間のコンピナートや四日市の名所旧跡と四日市港ポートビル「うみてらす 14 (フォーティン)」からの夜景のセットツアー）の定期・定時運行や、企業の研修など団体による貸切りチャーター便への対応にもこだわった。

また、企画段階から実施までの準備期間が短かった中で、使用する船の確保など、行政では困難な急遽かつ臨機応変の対応や調整も担った。

これらの調整を可能にしたのは、地元密着での継続的な事業運営と、その中で築き上げられた関係者との信頼関係があったからだろう。これも地元の、強固な「人」のつながりの力である。

なお、市などの行政は夜景クルーズ事業に対して、情報発信、飲食など観光関連の担い手マッチングや立ち上がり期の人的支援を担ってはいるが、本体事業への補助金の支援は行っていない。そのため、観光事業者たちは全く新しい事業としての夜景クルーズに、リスクを伴い踏み切ったわけであるが、それは自分たちのまちを思う気持ちと、積み上げてきた「人」のつながり、そしてそれらを基にしたチャレンジ精神があったからだろう。

夜景クルーズ事業は現在、独立採算の着地型旅行商品として、ホテルや鉄道とのセット料金なども設け、宿泊や飲食につながるよう、継続してお客様をお迎えする工夫を行っている。

最後の3点目は、お客様にわかりやすい受付、案内のワンストップ化である。

これはクルーズ乗船前のお客様に、良くも悪くも一番の印象を与えるものである。この業務に重要な役割を果たしたのが、四日市観光協会の落合純二氏である。落合氏は、平成22(2010)年3月から、観光コーディネーターとして「四日市コンビナート夜景クルーズ」の準備にかかわった。

5月には観光協会の産業観光PR部会の事務局的存在として、石井氏、大山氏、八馬氏をアドバイザー

一に迎えた夜景クルーズ試乗会を担当し、7月からの運航開始に向けての受付業務などを一手に担った。

落合氏は、市内の写真家で数々のフォトコンテストで受賞歴のある島崎守氏の協力を得て、お客様からの撮影スポットなどの問い合わせに対して丁寧に対応し、トータルで夜景クルーズのスタートに重要な役割を果たした存在である。

もともとカメラが趣味だった落合氏は、その後も継続して島崎氏らとコラボし、海からだけでなく陸上、また四日市港ポートビル「うみテラス 14」(地上 90m)からの夜景ガイドマップなどの紹介コンテンツを制作して、全国に四日市のコンビナート夜景の魅力を発信している。



よっかいち工場夜景マップ

さん然と輝く四日市の夜景は、最先端の技術が作り出す光のアートです。ダイナミックな工場夜景を楽しもう！

オススメ

- 四日市港ポートビルうみてらす14の地上100メートルから見下ろす光の絢色のような夜景は必見です！
- 夜景クルーズに参加して海側からしか見ることのできない四日市工場夜景を鑑る非日常体験は超おすすめ！
- 陸上からはゆっくり鑑賞できる数多くのスポットが存在します。様々な角度からの夜景をお楽しみ下さい。

夜景クルーズ
開催されています！
是非お楽しみ下さい！
ご予約の会社名は
www.yokkai-kyo.co.jp
予約先 ☎059-327-5377
<http://ykyo.co>

詳細は 工場夜景 in 四日市～煌の世界へようこそ～ 検索

ちなみに、四日市のコンビナート夜景は、海から陸から、そして地上 90mから眺めることができることから「3D夜景」と呼ばれている。これは、平成 23（2011）年 2月に川崎市において開催された、「第 1 回 全国工場夜景サミット」の席上において四日市の特徴を一言で表現するために、落合氏が命名し発表したものである。

これらの特徴をもった景観、またそれを生かした「四日市コンビナート夜景クルーズ」が始まった次の年、平成 23（2011）年の年頭、四日市市では田中市長によって「四日市の観光元年」が宣言され、夜景クルーズをはじめ、様々な魅力をつなぎ、発信する四日市の観光に本格的に取り組むこととなっていった。

シティセールスに始まる観光の 10 年

「みんなが誇りを持てるまち」を目指す四日市市は、若者たちの発想をもとに進めたシティセールスと、その後の夜景クルーズの人気を好機と捉え平成 23(2011)年を「四日市の観光元年」と位置づけた。

これを受けて同年、四日市市、四日市商工会議所、四日市観光協会が連携したふたつの取組がある。そのひとつが、四日市市観光戦略会議による「四日市観光戦略43（東海道四十三番目の宿場町に因む）」の策定である。

【四日市市観光戦略会議 委員構成】

座長 服部 敦^{あつし} 中部大学 工学部 都市建設工学科教授

はじめ、広報・宣伝経験者、情報誌編集者など 計6名

これは、外からの目線を持ち、かつ四日市に造詣が深い方々の意見を取り入れてまとめられ、

- ① 「やってみる。経験する。進化する」実行性を重視。
- ② 「生活に根ざした四日市のかっこよさ」を追求。
- ③ 「市民が誇りに感じる四日市」の発見・創造がもてなし力の源泉。
- ④ 「四日市の来し方^{きしかた}」に向き合い、未来が感じられる時空の提供。
- ⑤ 民間・市民の発意・行動・ネットワークを重視し、公共が支援。

の5つを基本姿勢として、戦略の基本的な方向や具体的プロジェクトが提案された。

[参考]「四日市観光戦略43」 基本的な方向「四日市の地域資源の再発見」より抜粋

観光に出かける旅行者のニーズは、「団体旅行から個人旅行へ」という見かけの変化だけでなく、名所旧跡をめぐる非日常型の旅行から、様々な地域の生活文化を共有しようとする異日常型の旅行へと変化している。個々の旅行者は、歴史・文化・自然などの自分の関心に根ざしたテーマを携えて旅に出かけ、地域の人々と日常生活の中で交流することを望んでいる。こうした変化を受けて、これまで際立った名所旧跡などの観光資源に乏しかった地域でも、あらためて地域資源を再発見することで新たな観光が生れる可能性が生まれている。コンビナート夜景クルーズへの関心の高まりは、一つの証左である。地域資源の再発見にあたっては、外部の専門家などの視点、いわゆる“外からの目”がきっかけとして有効であるが、再発見された資源については、広く市民の中で認識され、共有されるべきである。

四日市観光戦略

四日市市観光戦略会議

<背景と目的>

環境改善の礎に立ち、工場夜景クルーズの人気を好機と捉え、2011年を「四日市の観光元年」と位置づけて、四日市の観光を活性化させる実践的な取組を推進するための戦略を作成。

4 3

Yokkaichi Mia



観光戦略の基本姿勢

- ①「やってみる。経験する。進化する。」実行性を重視。
- ②「生活に根ざした四日市のかっこよさ」を追求。
- ③「市民が誇りに感じる四日市」の発見・創造がもてなし力の源泉。
- ④「四日市の楽しさ」に向き合い、未来が感じられる時空の提供。
- ⑤民間・市民の発意・行動・ネットワークを重視し、公共が支援。

観光戦略の基本的な方向

- ①四日市の地域資源の再発見
地域の人々と日常生活の中で交流したいという観光ニーズの視点から、地域資源を再発見。農林水産物、定期市、自然、歴史、市民力など魅力満載。
- ②着地型観光の環境整備
地域資源を活かしてストーリー性のある多様な体験観光メニューを市民自らが用意。中心部にもてなしの拠点を。
- ③広域観光・国際観光のための連携創造
県3500万、北伊勢1600万の観光客呼び込み。夜の観光資源などの強みで広域観光のリーダーシップを。環境先進都市として国際観光を推進。
- ④四日市ブランドの構築
際立ったものがなくても、「ひととおり何でもある」四日市の総合力を発揮。生産量日本一の「土鍋」で様々な資源を総合化。
- ⑤四日市の魅力の発信
市民全員が四日市の「語り部」「もてなしの担い手」に。市民ひとりりが10人につながることで「300万人のリピーター」獲得へ。

観光プロジェクトの具体的な提案

- ①土鍋deごはん
土鍋生産、日本一の四日市から鍋食文化を発信。
一鍋の美味しいまち・四日市を普及/メニュー開発/鍋コンベンションなど
- ②“かっこいい四日市生活”
四日市の生活のかっこよさをみんなで共有、発信。
一市民参加ガイドブック/ビジュアル化/ホームページ刷新など
- ③四日市ナイトサファリ
夜の魅力満載の四日市を心ゆくまで探索。
一夜の観光ツアー/夜の食の充実/夜間景観/オールナイトイベントなど
- ④もてなし処“四十三茶屋”
東海道43番目の宿場町にようこそ。駅近に本来のもてなしを。
一駅前にも市民によるもてなし拠点/市民もてなし隊/もてなし市民講座など
- ⑤“四日の朝市”
四日市の原点、定期市の文化を継承、発展。
一中心市街地に4の市を設置/全国「〇日市」サミットなど
- ⑥北伊勢観光圏
北伊勢エリアを一大観光圏へ。リーダーシップを発揮。
一北伊勢の情報発信/北伊勢まるごとブランド/湯の山温泉と連携など
- ⑦四日市エコロジー・インターナショナル
四日市を国際的な環境コンベンションシティに。
一国際版夜景クルーズ/国際環境コンベンション誘致/多言語化など
- ⑧ナンバー43プロジェクト
四日市=“43”を特別な数字として社会に浸透。

※四日市は、市にも県名にも数字が入っている全国唯一の都市。四日市+三重を意味する“四十三(よそみ)”。四日市宿は東海道43番目の宿場町。

「四日市観光戦略43」概要版 (四日市市発表資料)

また、「四日市観光戦略43」では、

- ・観光の主役は民間であり市民であること
- ・行政や関係団体は、情報発信、担い手のマッチング、目利きなどの環境づくりや、立ち上がり期の支援といった役割を担うことなども求められた。

「四日市観光戦略43」による様々な取組を経た平成28(2016)年4月、四日市市では「四日市市観光・シティプロモーション条例」が施行された。以降、四日市の魅力を全国的に発信し、交流・定住人口の増加を目指す様々なプロモーション活動が行われ、田中市長勇退後の平成28(2016)年12月から、新市長に就任した^{ともひろ}森智広四日市市長によってその精神が受け継がれ、より一層進められている。

もうひとつの取組は、平成23(2011)年11月、四日市市、商工会議所、観光協会と全国の工場夜景都市との共催で、都ホテル四日市において開催された「第2回 全国工場夜景サミット in 四日市」である。これは、平成23(2011)年2月に川崎市で開催された第1回のサミットを引き継ぐイベントとして行われた。

工場夜景観光が、まだ全国的な広がりを見せていなかった頃のこと。工場夜景観光の先行地である川崎市や、室蘭市、北九州市そして四日市市が、工場夜景を観光資源とする都市やその連携機会を増やし、

共同して工場夜景の魅力を全国に広め、発信力を高めることを目的としたPRイベントである。

四日市でのサミットでは、第1部の記念講演で、東海旅客鉄道㈱の相談役で(公社)日本観光振興協会中部支部長などを務める須田寛氏によって、工場景観を含む「産業観光のこれから」と題した講演が行われた。

第2部では、機能美としての工場景観、産業景観などテクノスケープについて研究する、近畿大学理工学部社会環境工学科の岡田^{まさあき}昌彰准教授(現教授)がコーディネーターを務めたパネルディスカッションが行われ、会場を埋めた約300名の人々に、各都市の工場夜景の魅力が伝えられた。



「第2回 全国工場夜景サミット in 四日市」の様子（提供 四日市観光協会）

【令和元年現在、工場夜景観光都市は、室蘭市、千葉市、市原市、川崎市、富士市、四日市市、堺市、高石市、尼崎市、周南市、北九州市の11都市となり、サミットは各都市の持ち回りで開催されている。】

【各工場夜景都市の紹介】 [全国工場夜景都市協議会](#) [検索](#)

第3部は「四日市コンビナート夜景クルーズ」の体験に加え、この日の特別企画として四日市港ポートビル「うみテラス 14」からの夜景観賞が行われ、各都市の関係者やメディア、総勢 100 名を超える方々が四日市の工場夜景を堪能した。

この企画には、主催者としての田中市長のほかに、この日に向けて準備段階から特別に参加をお願いしていた方々がいた。

そのお一人が、四日市公害の認定患者であり、公害裁判の原告として唯一存命であった故野田^{ゆきかず}之一氏である。野田氏は、ポートビル「うみテラス 14」の窓際にひとり立って、コンビナートの方向をじっと見つめていた。

そこへ、田中市長が歩み寄る。二人が深く言葉を交わすのは、この日が初めてであった。

野田氏と田中市長はあいさつを交わしたあと窓の外を見つめ、人々はそのうしろ姿を暫し見守った。

すると野田氏が、「四日市がここまでになるとはなあ。だれも想像できやんだらうな、あのひどい時から見たら。犠牲はあったが、はよ良くなっただけ幸せやわな。こんなええ四日市に住めるとはなあ、よかったあ」

これに田中市長は「野田さんらがね、裁判を起こしてくれた。その成果やと思いますわ。あれがなかったらね、もっと遅れていた」と返し、

「俺のおるうちに、四日市から公害の名が消えてくれやんかなあ。私ら、自分が助かりたいために裁判を起こしたんやから、私らが四日市は悪いって宣伝したんも一緒やもん。」

「いや、でもそれがあったからこそ、今があるわけだし」

二人だけの会話は続いた。

野田氏は、一見して相手の人柄を見抜き、信頼する相手に対しては、その立場に応じた言葉をかける気配りの人である。15分ほどのやり取りであったが、野田氏は後日、田中市長のことを、「まじめで信用できる市長さん」と信頼感を口にしている。

また、公害によるぜん息の発作で、当時9歳の愛娘を亡くし、現在は「四日市公害患者と家族の会」の会長を務める谷田^{てるこ}輝子氏も参加された。

谷田氏は後日、市やメディアからのインタビューに対し、その時の気持ちを次のように述べている。「めちゃくちゃ悔しいけど、めちゃくちゃ綺麗な夜景やね。けど、四日市で昔こういうこと（公害で多

くの人が苦しみ、愛する娘も命を落とした)があったということだけは、伝えてほしいと思います。」

お二人のほか、四日市公害の発生当時から被害者に寄り添い、記録活動を行いながら長年、野田氏らとともに小中学校での語り部活動を続けていた故澤井余志郎^{よしろう}氏も参加された。

澤井氏は、この約1年半後の平成25(2013)年3月24日、「朝日プラス・シー」(朝日新聞)の工場夜景を特集した記事のインタビュー「ブームが再発防止につながれば」でこう述べている。

四日市はかつて公害の街でした。語り部仲間には、「工場萌え」ブームに対して、工場夜景を使った観光客誘致に反対する人もいます。「公害を出した工場群を売り物にするのか」と。でも、私は一刀両断に切り捨てることはできないと思う。四日市では1950年代後半に企業排水が問題になり、60年代には硫黄酸化物などによる大気汚染で多くの人がぜんそくに苦しめられました。認定患者は計2,219人、今（インタビュー当時）も400人を超える患者がいます。企業責任を認めた津地裁四日市支部の判決から40年経ち、患者や遺族は高齢化。風化も進みます。その中で、工場夜景ブームは多くの人にコンビナートを見る機会を与え、企業に見られている緊張感を持たせませす。再び公害を起こさせないためには、市民による監視が大切。特に夜景クルーズは、工場を玄関口ではなく、裏口にあたる海の側から監視することにもなります。今もコンビナートの操業は危険と隣り合わせです。ブームが公害の再発防止につながればと思います。

故野田氏、故澤井氏、谷田氏は、田中市長の決断によって平成 23（2011）年から整備の構想がなされた四日市公害に関する資料館（のちの「四日市公害と環境未来館」）のあるべき姿について意見を述べられ、また貴重な資料や証言などを提供し、さらに開館後には語り部活動など様々な面で協力される先輩たちである。

先輩たちには、辛く苦い経験を思い起こさせる工場の風景を、四日市市のシティセールスや観光に生かすという取り組みに対して、複雑な思いがあったに違いない。

そのうえで参加された気持ちを考えれば、夜景クルーズをきっかけのひとつとして、四日市公害があったという事実や、歴史と教訓を伝えていくことが、この事業に携わる「人」の心していくべきことである。



写真左から故野田氏、谷田氏、故澤井氏（「四日市公害と環境未来館」開館式典）

夜景クルーズは 10 周年を迎えた令和元（2019）年 10 月現在、個人客のほか企業などの団体によるチャーターにも対応し、3 万 6 千人を超えるお客様が乗船している。

クルーズ船は 35 名定員の海上タクシー（沖合に停泊する船への乗組員送迎用）や 138 名定員の観光船を使い、年間約 5 千人（令和元年）のお客様が乗船する。



クルーズ船（35 名定員）



クルーズ船（138 名定員観光船）

コンビナートをはじめ、港湾施設などが一望できる四日市港ポートビル「うみテラス 14」には、社会見学をはじめ多くの人々が訪れ、特にそこからの夜景は平成 27（2015）年に「日本夜景遺産」に認

定されたこともあり、週末などの夜間開館日には多くの入場者がある。

四日市の工場夜景観光は、その客数ではいわゆる観光地と比べるまでもない。しかし、ビジネスや周辺観光などで滞在する、年間延べ 60 万人を超えるといわれている宿泊客に、夜景クルーズや Jazz ライブ、三重の食材を提供する飲食店など四日市ならではの夜型観光メニューを提供することで、このまちのファンを少しずつ、ゆっくりと増やしていくことはできる。

実際、夜景クルーズが始まってからの 10 年間に、観光関係者だけでなく個人のサイトにおいても、“コンビナート夜景”というキーワードで、その画像や動画の紹介が増えてきた。夜景クルーズへの申し込みは女性からが多く、参加者自体も過半数が女性で、女性同士、女性が男性を伴って申し込むといったパターンが多いこともわかってきた。お客様は、市外からが 7 割を超え、その内のほとんどが三重県外からで、ゴールデンウィークには全員が県外からという日もあり、北海道から沖縄まで全国から、遠くは海外からも幅広い年齢層のお客様が集まる。

乗船後のアンケートでは、クルーズガイドへの満足度が高いことも特徴だ。

スタートから 10 年、「四日市コンビナート夜景クルーズ」は、一度の事故もなく、毎週末キャンセル待ちが出るほどの、四日市を代表する観光資源となっている。

四日市だからこそ

「四日市の観光元年」が宣言された平成 23（2011）年は、田中市長の決断によって、四日市公害に関する資料館整備の構想がなされた年でもある。その施設が、平成 27（2015）年 3 月に開館した「四日市公害と環境未来館（以下、「環境未来館」と呼ぶ）」である。

環境未来館の開館以降、夜景クルーズのガイドはその語りの最後を、次のような言葉で締めくくる。

『四日市といえば、今もなお「公害の町」という印象を持たれている方が数多いのも事実です。

しかし、今では川べりでホテルが舞い、ウミガメも産卵に戻ってきました。私たち四日市市民は、過去の苦い経験を生かし、この美しい自然と様々な経済活動の発展を後世に伝え、残していくよう頑張っています。四日市市では、平成 27(2015)年に四日市公害の歴史と教訓を次の世代に伝えるため、「四日市公害と環境未来館」を開館しました。ぜひお立ち寄りいただき、四日市をもう一度見直していただければ幸いです。』四日市に住む私たちの中でも、広く共有したい言葉である。

ふるさとを思う「人」によって、いまの四日市の姿を入口に、これまでの歴史を伝えるという一連の行程が、“四日市だからこそ”のツーリズムのかたちである。

田中市長は、先人たちの痛みや努力に報いるために、二度と公害を起こさない決意と、次の世代に豊かな環境を引き継ぐという意志、そして公害を乗り越えてきた“四日市だからこそ”の発信が、誇りを持てるまちを目指すための確かな道のりであると考えたのだろう。

令和元（2019）年5月、三重テレビのインタビューで環境未来館の使命と四日市への思いを次のように語っている。

「四日市公害のような環境破壊を、二度と起こさないという強い決意と意志を共有していく、そのための発信拠点が必要だと考えたことがひとつ。もうひとつは、まちの発展のためには、都市イメージが非常に重要な要素ですが、残念ながら四日市は、一步県外に出れば、今も公害のまちだというイメージが色濃く残っています。公害を隠すということではなく、むしろ、この四日市公害を乗り越えてきた歴史、あるいはどうやって環境改善を成し遂げてきたかということ、を、国の内外に情報発信していくことが、都市イメージの変革につながります。公害の歴史と教訓を次世代に継承していくことと共に、この視点も忘れてはならないと思います。」

市長退任から2年余り。思いは今もなお熱い。

環境未来館が開館して間もない頃、『工場萌え』の著者のひとり、大山氏が環境未来館を訪れている。

本人曰く、心のなかで棚上げしてきた公害の歴史と、真摯に向き合うために。

その来館時のこと。大山氏が環境未来館の解説員から視聴を薦められたのは、ぜん息による発作で、当時9歳の愛娘を亡くした谷田輝子氏の証言映像であった。

その映像の最後には、谷田氏が夜景クルーズに乗船したのちに感じたあの言葉、「めちゃくちゃ悔しいけど、めちゃくちゃ綺麗な夜景やね。けど、四日市で昔こういうことがあったということだけは、伝えていってほしいと思ってます。」という部分があった。

大山氏は、この証言映像や展示を見たことで、公害があったという事実だけでなく、その時代を生きた人に、自分を重ねて見ることができると思ったのだろう。来館後に自身のブログで「四日市公害と環境未来館は、本当に興味深いのでおすすめ」と紹介している。

また大山氏は、同時期に発行された雑誌、『DARK tourism JAPAN (ダークツーリズム ジャパン) 産業遺産の光と影』(東邦出版 2015年)にも寄稿し、環境未来館を紹介してくれている。

『「忘れない」代わりに「思い出せる」旅を 四日市逍遙』と題された文章には、忘れないでいるのはしんどい。「忘れない」の代わりに「思い出せる」を・・・と記され、次第に風化していく歴史や記憶、時代の変化による継承の断絶に対して、示唆に富んだアイデアを投げかけている。

なお、戦争や災害など人類の悲劇の場をたどる旅は、欧米で「ダークツーリズム」と呼ばれ、被害にあった地域自体ではなく、被害が生じてしまうという社会構造や問題の核心部分がダークという意味で名付けられたと言われている。

しかし、その土地に住む人々は、「ダークツーリズム」としてわがまちを訪れてもらうことに違和感があるのではないだろうか。戦後、日本の高度経済成長の陰で多くの被害、一人ひとりの人生にとっては非常に大きな被害があったことは、負の遺産として継承し、またそのことを教訓として次に生かしていかなければならない。

そういった意味では、“ダーク”ではなく、次の世代に生かすための遺産（Heritage:ヘリテージ）を引き継ぐツーリズムではないだろうか。

呼び方はともかくとして、多くの人が四日市を訪れ、いま現在の姿を観て、環境未来館で公害の被害とそれが起こった背景を知り、同じような失敗が繰り返されないよう「思い出せる」何かを持ち帰ってもらう。そのことが大切なことである。

八馬氏、石井氏、大山氏は平成 27（2015）年 11 月、東京日本橋にあるアンテナショップ「三重テラス」において行われたトークショーで、四日市の工場夜景の魅力を存分に語ってくれた。

さらに大山氏は、平成 29（2017）年 11 月に四日市で 2 度目の開催となった「第 8 回 全国工場夜景サミット in 四日市」での基調講演など、縁をつないでもくれている。

齒に衣着せぬ表現力で、多くのことを気付かせてくれる四日市にとって大切な「人」たちである。

観光がもたらした意識の変化や気付き

外から訪れる人とのふれあいは、そのまちの人々に喜びや気付きをもたらす。

クルーズガイドの皆さんは、市外、県外からのお客様を意識し、案内の中に四日市の成り立ちや、自慢の逸品の紹介も織り交ぜる。ガイドになる前には知らなくても済んでいたであろう、わが町の魅力にも敏感になり、また新たな魅力への気付きにつながったかもしれない。

もちろん、お客様により喜んでいただくために、常に最新の解説ができるよう情報収集は欠かさない。

同様に市外、県外からのお客様に接することが多くなった観光事業者の社員たちも、夜景クルーズでお客様を迎えることになって以降、四日市ならではの観光事業に携われる仕事に誇りを感じ、生き生き

と働けるようになったという。

また、それまで港内に停泊する船の乗組員を相手に、特別に丁寧な会話や応対などのサービスを期待されていなかった船会社の社員たちも、お客様に対する乗船時の安全確認や丁寧な案内を率先して行うようになったとも聞く。

この10年で、外からのお客様が四日市の「人」たちの意識を変え、もてなしの心を育てたのである。

こんな話もあった。四日市に住む大学生が、ある会議の場で「県外の友人と四日市の話になったときに、あの工場夜景の四日市！と言われた」と、発言した時のことである。これに、他の出席者からは「えっ、そうなんだ」という驚きの声ももれた。この時も、自分の住むまちの外からの観られ方への気付きがあったのだろう。

前出の『まちづくりの非常識な教科書』にはこうも述べられている。

内部の人間の自分の町へのイメージや認識というのは、実は意外にも外部からの逆輸入された情報によって、大きく左右されているものなのである。

クルーズに乗船されるお客様は市外からが7割を超え、特に県外からは全体の5割に上る。

外からの印象が、わがまちの魅力や強みへの気付きにつながっていく。

そしてそれは、四日市で起こったことを忘れる上に成り立つのではない。

「みんなが誇りを持てるまち」とは、まちの歴史を学び、今日を築き上げてきた先人たちの労苦に報い、また、自らも次の世代に承継する存在になっていく過程で築かれていくものなのだろう。クルーズガイドや、環境未来館解説員をはじめとした「そらんぼ四日市」（市立博物館・プラネタリウム、四日市公害と環境未来館）のボランティアの皆さんは、伝える活動への参加意識と充実感に満ち溢れている。

『まちづくりの非常識な教科書』の最後にはこうある。

町おこしとは人が起きてくることだと思っている。人が起きると町は起きてくるのである。さらに、つまるところの地域の活性化、社会の活性化とは何かと突き詰めていくと、それは「ひとりひとりが自分の個性を生かして地域や社会に貢献して生き生きと生きること」だと思うのである。思えば、ひとりのなかには無数の先祖がおり、ひとりが輝くということは、今日を築かれた先祖先人の労に報いることにつながるのである。その人を通じて無数の先祖をいまに生かし、輝かせることにつながるのである。ひとりが輝き、先祖が輝き、町が輝き、国が輝き、万物が輝くのである。総括すると、町おこしは経済の活性化だけの話ではない。その土地に眠っているものを、よみがえらせることだと強く思う。

また平成 21（2009）年 9 月、市東京事務所で初めて開催された座談会の中心人物、映画監督の瀬木氏も、まちの誇りについて以下のように寄稿している。〔(公財) 四日市市文化まちづくり財団発行「文化展望・四日市 LA SAUGE」39 号（2018）43 ページから引用〕

シティ・プライドという言葉がある。故郷への誇りを市民自身が発信するまちとそうでないまちの差は大きい。シティ・プライドは来訪者のもてなしに繋がり、そのまちのファンを作り、魅力を増幅する。人口減少時代に生き残る都市とは、そういったまちではないかと僕は思う。

言葉は違えども、その意味するところは同じであろう。

「人」の和

旅から帰った後に心に残るのは、その土地ならではの風景や食、名物のほかに、そこで出会った「人」との会話や心遣いであったりする。わがまちを思う「人」によって、どのまちでも魅力をしめず観光に組み、それを誇りにつなげていけるのではないだろうか。

四日市市におけるシティセールへの取り組み以降、「人」の和が積みあがってきた経過と共通する点が多い論文がある。日本政策金融公庫総合研究所の研究者によりまとめられた、『イノベーションを促す「ストレンジャー」の視点—多様性がもたらす革新を実現するための諸条件—（日本政策金融公庫論集第8号 2010年）』に掲載された以下の内容は、いわゆる伝統産業が新たな発想、アイデアによってイノベーションが促され、新たな製品開発につながった例をもとにまとめられたものである。

地域経済を取り巻く環境が変化するなかで、新たな発想をもたらす人材（本稿では「ストレンジャー」と呼ぶ）を地域外あるいは異業種・異分野から受け入れることで、新たな製品の開発などに成功し、地

域経済の活性化を実現するケースが少なからずみられる。これは、単に、ストレンジャーの発想がストレートにイノベーションにつながるというよりは、ストレンジャーのもたらす新たな視点が既成概念の再考を促し、地域経済を担う人々の意識が変化することで、地域経済のなかで培われてきた多様な経験が新たな文脈のなかで解放され、それが地域経済活性化への可能性を開くためであると我々は考える。

実際、代表的な事例を観察すると、ストレンジャーの視点・行動がきっかけとなって、いろいろな摩擦を経ながらも、地域産業に携わる人々の意識が徐々に変化するとともに、多様な経験・アイデアが持ち寄られ、それらが互いにハーモナイズするなかで、イノベーションが実現していくというプロセスを明瞭に見出すことができる。また、事例の観察から、ストレンジャーがその役割を果たすための条件として、(1)ストレンジャーに対する権限の付与、(2)軋轢を調整する「調停者」の存在、(3)闊達なコミュニケーションを促す場の存在、という三つの条件が働いていることが見出された。

ストレンジャーの新たな視点を契機としてイノベーションを実現しようとするものの、うまくいかないケースは全国に多々存在する。こうしたケースでは、本稿で示したイノベーションプロセスがどこかで断ち切られている可能性がある。ストレンジャーの視点を契機としたイノベーションプロセスの中核にあるのは、地域経済を担う人々の意識の変革であり、さまざまな工夫によってそれが円滑に進む条件

を作っていくことが必要であるといえよう。

日本政策金融公庫総合研究所『日本政策金融公庫論集』第8号、2010年8月、P.53「要旨」より転載。

以上は、人の交流、観光における人々の意識変革を促すプロセスにおいても、それぞれ役割を担う「人」の和が欠かせないということを再認識させてくれる。

四日市というまちが伝え続けてきた10年を振り返ると、東京からふるさと四日市への思いを語ってくれた若者たち、その思いを受け止めつないでくれた『工場萌え』著者の石井氏、大山氏、それをアカデミックに深めてくれた千葉工業大学の八馬教授、近畿大学の岡田教授、さらに「四日市観光戦略43」をまとめてくれた中部大学の服部教授、そして四日市を訪れるお客様たちは、このまちに新たな気付きをもたらしてくれたストレンジャーたちである。

また、新たな観点であった工場夜景観光や観光戦略に示されたプロジェクトの実現に向け、明快なリーダーシップで支えてくれた四日市商工会議所の齋藤会頭、コンビナート企業各社や企業OBとの調整役を担ってくれた田中氏や樋口氏、落合氏は、余人をもって代えがたい存在である。

そして、お客様の心に残ることを持ち帰っていただくという視点に立って、四日市周辺の観光とコミ

ユニケーションをとり、新たな感動を創造しながら多くの人をお迎えしていく。

四日市の内と外、市民ボランティアや事業者など、それぞれ違う「人」の和が、相対的には小さくとも、他にはない絶対的な魅力、強みをつくり支えていく。

四日市の魅力について語ってくれた若者や、それをつないでくれた写真家たちは、工場夜景観光という“ふるさと納税”にも値する発想を与えてくれた。それを生かすのは四日市に住む私たちである。

そして、重ねて忘れてはならないことは、四日市が辿った歴史に思いを馳せ、次の世代に伝え、つなげていくことである。

公害の発生源となったコンビナートを観賞するという取組は、いまだ癒えない苦しみに寄り添う気持ちが届かないのではないかとの批判もあるだろう。

しかし、時代が変わり、世代も変わっていく中で、環境の破壊が二度と繰り返されないよう、歴史とそこから得た教訓を次の世代につなぐことの重要性は増していく。

そんな今だからこそ、幅広い世代が興味を持てるようなきっかけ、入口のひとつとして、“四日市だからこそ”のかたちがあってもよいのではないだろうか。

関心を持ち続けるために、「忘れない」代わりに大切なときに「思い出せる」ように。

四日市で観るのは工場夜景そのものと、もうひとつ四日市が経験した歴史とそこから得た教訓である。
そのことを四日市の「人」とともに伝え続け、これからもお客様をお迎えしていく。

おわりに

『工場萌え』著者の石井氏が学生の頃見たSF映画、『ブレードランナー』が描いた世界は2019年。映画に登場する都市の姿は、コンビナート夜景を思わせる光景だ。

しかし、街に霧^{もや}がかかったような幻想的な景色は、テクノロジーの進化にもかかわらず、随所に廃退の匂う近未来を描いている。

公害裁判を闘いぬいた故野田之一氏が、我々に繰り返し言った言葉は、「自分の子孫に威張れるような環境を作っておく義務があるわさ。いま現在、生きておる者は。」

それらに込められているメッセージは、物質的な豊かさを求め続けて今を生きる私たちへの警鐘ではないだろうか。私たちは、このメッセージから次に伝える大切なことを受け取らなければならない。

それが、先輩たちから歴史を受け継ぐ者の使命であり、次の世代への責任でもある。

誇りを持てるまちには、そのまちらしさを大切にしたい、そこにしかないものを伝える「人」の存在がある。そして、ひとりではできないことが「人」の和によって実現されていく。

四日市にはまだ、つながっていない「人」たちと、眠っている強みがある。

「四日市コンビナート夜景クルーズ」の紹介

[四日市コンビナート夜景クルーズ 検索](#)

三重県四日市市は、日本の中部、伊勢湾の北西部に面した人口約 31 万人の都市。名古屋からは鉄道（特急）で 30 分ほどの位置にある。臨海部には国際貿易港としての四日市港や日本有数の工場地帯が広がり、旧東海道の宿場町としての歴史もあるまちである。



夜景クルーズは、繁華街のある市中心部の海側、千歳地区の栈橋から出航する。クルーズ船は、先ず四日市港発祥の地で明治 32（1899）年に外国貿易が始まった旧港と呼ばれる場所を訪れ、国の重要文化財「潮吹き防波堤」を案内したあと、コンビナートの夜景観賞へと進む。



四日市コンビナート夜景クルーズ コース図（提供 ㈱第一観光）



潮吹き防波堤（国指定 重要文化財）

四日市コンビナートは、稼働開始が早い順に、第一（^{しおはま}塩浜）、第二（^{うまおこし}午起）、第三（^{かすみ}霞）というエリアに分かれる。「60分プラン」では、旧港を出て第二、第三コンビナートの順で進み、折り返したあと最も人気そして歴史のあるエリア、第一コンビナートへと進む。

旧港を出て先ず目に入るのは、昭和 38（1963）年に稼働した第二コンビナート。



夕暮れ時の第二コンビナート（右奥に第三コンビナート）

そこは石油化学工場や発電所、製油所のプラント、原油のタンク群があるエリアである。

第二コンビナートの原油タンク群は、第一コンビナートのそれと同様、伊勢湾沖のシーバース（岸壁に着くことができない大型タンカーを係留し、原油を降ろすための海上施設）と海底に設置されたパイ

ラインでつながり、そこから送られてくる原油を保管する。

第二コンビナートを見ながらさらに進むと、第三コンビナートのLNG（液化天然ガス）やLPG（液化石油ガス）の貯蔵タンク群、そして石油化学工場のプラントの灯が目の前に広がる。

運が良ければ、中東などから来るLNG船が貯蔵タンク横に着岸している様子も見る事ができる。



第3コンビナートのLNG貯蔵タンクと、その横に着岸するLNG船 （提供 四日市観光協会）

第三コンビナートは「出島型コンビナート」とも呼ばれ、昭和 47（1972）年、まさに四日市公害裁判判決の年に稼働したエリアで、公害防止装置の設置や、住居地域との間に緑地帯を設け、さらに運河

を挟んだ海側を埋め立てるなど様々な公災害への防止対策がなされた場所でもある。

第二コンビナートとの間には、発電用の燃料や石油化学製品の原料を送るための配管橋も架かる。



第三コンビナートのプラントと配管橋（提供 四日市観光協会）

クルーズ船は、配管橋をくぐり第三コンビナートの夜景を見て折り返し、もと来たコースを戻って、最終の観賞エリア、第一コンビナートへと進む。

第一コンビナートは、昭和 34(1959)年に稼働したわが国初の本格的な大規模石油化学コンビナートで、そこは太平洋戦争が終戦となる昭和 20 (1945) 年に、度重なる空襲によって壊滅的な被害を受けた第二海軍燃料^{ねんりようしょう} 廠 (海軍の燃料工場) があった場所である。

戦後復興、高度経済成長のシンボルとして、複数の企業に払い下げられ形づくられた第一コンビナートは、稼働後まもなく水質の汚濁や大気の汚染、いわゆる「四日市公害」が発生した場所でもある。

煙突からの排煙に含まれる亜硫酸ガス(二酸化硫黄)を主な原因として、多くの人々にぜん息などの健康被害をもたらした当時の工場群は、その後の公害防止対策、行政による規制や監視などによって操業しながら環境改善がなされてきた。

現在は、プラントの放つ光、化学製品など積み降ろしのための棧橋の灯り、煙突先のフレアスタック(製造過程で発生した不要なガスなどを煙突先端のバーナーで燃やす炎。フレアはゆらめく炎、スタックは煙突の意)などが織りなす幻想的な風景とともに、その歴史を感じられる場所となっている。



千歳埠頭からの第一コンビナート

夜景クルーズでは、お客様からよく「プラントの灯りは、夜景クルーズのために点いているのですか」という質問があるが、答えはNOである。

24時間、365日稼働し続けるプラントは、その安全管理のために昼夜問わず人の目によって監視され

ている。照明はそのための灯りである。まさに不夜城といったところだ。

「四日市コンビナート夜景クルーズ」は、毎週金曜・土曜（冬季は毎週土曜日のみ）や、ゴールデンウィークの時期などに、「60分プラン」のほか「90分プラン」も設定されている。

「90分プラン」は、「60分プラン」のコースに加え、第三コンビナートに隣接する四日市港霞ヶ浦埠頭において、コンテナの積み降ろし機械であるコンテナクレーン（通称：ガントリークレーン）などを見ることができる。

地上からは普段、これらの機械に近づくことはできない。そこが「90分プラン」の魅力でもある。

夜景クルーズが認識されてきたからだろうか、着岸する貨物船の作業員たちがクルーズ船に向かって手を振ってくれるようになった。

お客様のほとんどが、これらの光景にカメラやスマホを向ける。クルーズガイドはコンビナートが今日まで私たちの生活に欠かすことのできない製品や素材をつくってきたこと、そして公害が発生した事実にも触れ、さらに詳しく知り、学んでいただくために「四日市公害と環境未来館」へといざなう。



「四日市公害と環境未来館」の紹介

四日市公害と環境未来館 検索

「そらんぼ四日市」(市立博物館・プラネタリウム、四日市公害と環境未来館) 全景

「四日市公害と環境未来館」は、四日市公害の歴史と、そこから得た教訓を伝え、環境改善の取り組みや産業の発展と環境保全を両立したまちづくり、さらにその中で蓄積してきた環境技術、経験を国内外に情報発信するための施設である。

ひとつの建物内にある市立博物館・プラネタリウムとの総称を「そらんぼ四日市」と呼び、これらを併せて見ることで、私たちの生活と環境との関係を知り、地球規模で環境を考えることができる。

お客様は、まず「そらんぼ四日市」3階の市立博物館常設展示「時空街道」を進む。



原寸大で再現される弥生時代の竪穴住居と室町時代の四日市の市



江戸時代の四日市宿 （以上 四日市市立博物館提供）

「時空街道」では、弥生時代の竪穴住居にはじまり、室町時代に四のつく日に「市」が立ったことから四日市となったまちの様子や、東海道の四十三番目の宿場町であった江戸時代の四日市宿の様子が、それぞれ原寸大で再現されている。ここを歩くことで、原始・古代から江戸時代までの四日市が時間をかけて発展し、人々のくらしが少しずつ豊かになっていったことを体感できる。

これらの展示は、博物館ボランティアの皆さんによる解説や、映像などによって理解しやすくなっている。

「時空街道」を過ぎ、順路に従って進むと「四日市公害と環境未来館」の展示室につながる。

ここでは明治以降の産業発展と、1950年代からの戦後復興、高度経済成長期における急激な発展、そのなかで発生した四日市公害、さらに現在の環境と未来の環境問題について学べる。

「産業の発展とくらしの変化」コーナー



明治以降の四日市港を中心とした発展の様子と、戦後にコンビナートができるまでの様子を、写真や映像、暮らしぶりを再現する展示によって知ることができるコーナー。

明治の頃、四日市港では外国との貿易が盛んになり、綿花などの輸入が始まると紡績や製糸業、窯業などがまちの発展を支えていった。大正を経て昭和に入ると、四日市市は紡績などの軽工業から重化学工業の誘致へと転換。アメリカとの開戦となる昭和 16（1941）年には、市内の塩浜地区において、航空機や軍艦の燃料を製造する第二海軍燃料廠などの軍需工場が稼働を開始した。

終戦となる昭和 20（1945）年、四日市は 9 回にわたる空襲によって市街地や第二海軍燃料廠を中心に壊滅的な被害を受け、多くの尊い命が失われた。

戦災復興の都市計画などを経た昭和 30（1955）年、戦後の産業発展を目指す国の政策を受け、旧第二海軍燃料廠跡地の払い下げが決定された。翌年の昭和 31（1956）年からは複数の大企業によって、わが国初の本格的な大規模石油化学コンビナート、第一（塩浜）コンビナートが建設されていった。

「公害の発生」コーナー



深刻な健康被害が発生した当時、人々がどのようにくらしていたのかを、資料や写真、映像、ぜん息患者の音声などで伝えるコーナー。

床面の航空写真では、公害が激しかった頃のコンビナートと住居地域との位置関係がわかる。

昭和 34（1959）年の第一コンビナート稼働開始後、工場排水によって海水が汚染され、油くさい魚のとれる範囲が広がった。当時は、経済発展を重視する考え方が強かったことから、日本中の工業都市で環境への配慮やその対策が立ち遅れていた頃である。間もなく工場からの排煙に含まれた亜硫酸ガス（二酸化硫黄）を主な原因とする健康被害「四日市ぜんそく」が発生した。子供や高齢者を含め、ぜん息発作による死亡者や、苦しきのあまり自殺する人も出て、大きな社会問題となっていった。

「四日市公害裁判シアター」



公害が激しかった頃の資料映像に、新たに撮影した関係者の証言を交え、四日市公害裁判とその判決の影響を解説する。

上映内容：「四日市公害裁判の記憶」
(約 20 分) ほか。

公害による被害が続いた昭和 42 (1967) 年、工場近くに住む公害認定患者のうち 9 名が、第一コンビナートの臨海部に立地する企業 6 社を相手取り、損害賠償を求める「四日市公害裁判」を提起した。

当時、我が国の経済成長を支えた企業の責任を問う裁判は 5 年にわたったが、昭和 47 (1972) 年 7 月 24 日、原告勝訴の判決が下され、企業側はその結果を受け入れて控訴せず、判決は確定した。

「環境改善の取り組み」コーナー



市民・企業・行政の取り組みによって、昭和 51（1976）年度に、亜硫酸ガス濃度が環境基準をクリアしたこと、また、どのように空気や水をきれいにしていったのかを展示するコーナー。

市内のリアルタイムの大気環境測定値も見るができる。

公害裁判の判決前後には、行政による法律などの整備、規制の見直しや監視、企業による公害防止装置の整備など様々な対策が行われていった。これらによって四日市地域は次第に環境が改善し、青空を取り戻していった。四日市市では現在、環境改善の取り組みや産業の発展と環境保全を両立したまちづくり、さらにその中で蓄積してきた環境技術、経験を海外にも伝えている。

「まちづくりの変遷」



四日市市域のジオラマと大スクリーンに映像を投映、解説するコーナー。

上映内容：①四日市公害の発生と対応、②まちづくりの変遷、③四日市空襲、④〔子供用アニメーション〕環境改善のあゆみ

「情報検索コーナー」



公害認定患者や家族をはじめ、当時を知る市民、司法、行政、企業などの関係者約 60 名の証言映像が、インタビュー形式で視聴できるコーナー。

公害発生に至る時代背景など体験談を視聴することで、自分に重ねて公害、環境問題を感じることができる。

「現在の四日市」コーナー



市内に今も残る豊かな自然の姿や、環境活動団体、企業などによって行われている様々な環境活動を紹介するコーナー。

「環境先進都市四日市」コーナー



地球規模で拡大する環境問題を伝え、環境への様々な取り組みを紹介、展示するコーナー。展示を見て感じたことをメッセージに残し、次の来館者に伝えることもできる。

「四日市公害と環境未来館」では団体見学時など、事前の予約によって語り部の方々から体験談を聴くこともできる。しかし、公害発生から半世紀以上経過した辛い体験を話すことは、高齢となった方々には負担が増していく。関係者約 60 名の証言映像は、語り部の方々の負担を軽くしていくものでもある。さらに、養成講座を受講した市民ボランティアの皆さんが解説員を務め、幅広い世代に応じた展示解説と、伝承のための活動が行われている。



「四日市公害と環境未来館」解説員の皆さん（以上「四日市公害と環境未来館」提供）

「四日市ぜんそく」や「水俣病」、「新潟水俣病」、「イタイイタイ病」は、四大公害（病）として、全国の小学五年生が社会科で学習する。

「四日市公害と環境未来館」は、子供たちをはじめ公害問題をかかえている海外の人々に、四日市の経験を伝え、教訓として生かしてもらうための施設でもある。平成 27（2015）年 3 月の開館以来、令和元（2019）年 10 月までに中国やインド、ベトナムをはじめとするアセアン諸国など、90 を超す国々から研修などでの来館がある。

あとがき

四日市市のシティセールスから始まった10年は、「人」がつながる10年でもあった。

この間、私自身、多くの方々に勇気づけられ、大切な縁をいただくことができた。幸運であったのは、“四日市だからこそ”の事業に携われたことだけではなく、これらに取り組むことが幸せだと思う仲間に出会えたことだ。本書にお名前を記させていただいた方々、四日市のいまを取材いただいたメディアの方々、名前は出さずとも絶えず傍で支えてくださった皆様に心から感謝申し上げる。10年という節目は、変わらない大切なことと、時代に合わせ変えていくことを今一度考える機会でもある。

そのうえで“四日市だからこそ”を進化させ、これからもお客様をお迎えしていきたいと思う。

なお、本書に記した意見や考え方は、個人の見解に基づくものであることをご理解願いたい。

最後に、書籍化にあたって、東京書籍様、朝日新聞社様、伊勢新聞社様、交通新聞社様、主婦の友社様、中日新聞社様、東邦出版様、日本政策金融公庫総合研究所様、三重テレビ放送様をはじめ関係者の皆様にご協力いただき心から御礼を申し上げます。

そして、本書全体を通じてご助言いただいた田中俊行様に心より感謝申し上げます。

参考文献等

いまの四日市を観る

須田寛『図で見る観光』 p. 14 (交通新聞社 2018年発行)

きっかけは若者たちの故郷への思い

石井哲、大山顕『工場萌え』 p. 3 (東京書籍 2007年発行)

「東京発 四日市へ」記事 (伊勢新聞 2009年11月13日)

「工場は美しい」記事 (伊勢新聞 2010年2月19日)

四日市市のシティセールス用ポスター (四日市市発表資料)

「四日市コンビナート夜景クルーズ」始動

吉川美貴『まちづくりの非常識な教科書』 p. 110, 111 (主婦の友社 2018年発行)

「工場の夜景を切手に」記事 (中日新聞 2012年11月30日)

シティセールスに始まる観光の10年

『四日市観光戦略43』 p. 3, 5 (四日市市発表資料)

「朝日プラス・シー」記事 (朝日新聞 2013年3月24日)

四日市だからこそ

『DARK tourism JAPAN 産業遺産の光と影』 p. 76 (東邦出版 2015年発行)

「こっこの空～語り継ぐ四日市公害～」 (三重テレビ 2019年放送)

観光がもたらした意識の変化や気付き

吉川美貴『まちづくりの非常識な教科書』 p. 137, 138, 188, 189

(主婦の友社 2018年発行)

『文化展望・四日市 LA SAUGE (ラ・ソージュ) 39号』 p. 43

(四日市市文化まちづくり財団 2018年発行)

「人」の和

日本政策金融公庫総合研究所 上席研究員柴山清彦・同所主任研究員丹下英明

『日本政策金融公庫論集第8号 2010年8月』 p. 53

イノベーションを促す「ストレンジャー」の視点

—多様性がもたらす革新を実現するための諸条件—



著者プロフィール

岡田 良浩（おかだ よしひろ）

1962年 三重県四日市生まれ。 四日市市職員

2008年 四日市市東京事務所にてシティセールスに従事

2011年 市観光推進室にて観光振興に取り組む

そのほか、スポーツ振興や四日市港の管理運営などを担当

2015年 「四日市公害と環境未来館」開館時の副館長

※本書で使用した工場夜景画像等は、写真家 島崎守氏より提供されたものです。

※本書の一部、あるいは全部を無断で複製・複製・転載することは、法律で認められた場合を除き、著作権侵害となります。

工場萌えでふるさとの光を観る ～“四日市だからこそ”の10年～

発行 : 2020年4月1日

発行者 : 岡田 良浩